

問題【国語】

次の文の()に色を表す漢字を入れてみましょう。

- (1) ()々とした若葉
- (2) 部活で()白戦を行った。
- (3) ()色い声援

豆知識 雑学コラム

いろいろな言葉

日本語には色を表す言葉がどれくらいあるのでしょうか。色を表す言葉で思いつくものといえば、虹を描く時に使う7色「赤・橙・黄・緑・青・藍・紫」がありますよね。また、同じような色でも「赤」「紅」「朱」などと明るさや彩度などで細かく区別することもあります。さらに「小豆色」「ウグイス色」のように、食べ物や生き物の色から呼び名がついた色まで、数えきれないほどの色が現代日本語にはあることがわかつてと思います。今回はそんな色について考えてみましょう。

(1)は「青々とした」ですね。この表現以外にも「青汁」や「青信号」のように実際には、「緑」に見えるものに「青」という言葉を多く使うことがあります。なぜ「緑」のことを「青」というのでしょうか。それは古代の日本語では、色を表す言葉は「白」「黒」「赤」「青」の四つの言葉しかなく、現代の「緑」の色を表す時に「青」を使っていたことに由来します。同じ漢字文化の中国でも葉物の野菜を「青菜」と呼び、「緑」のことを「青」で表現しますが、英語では、こういった表現はしません。米国で青信号を見て「ブルーだ」と言わないように気をつけましょう。

(2)は「紅白戦」ですね。二つのグループに分けて戦う時に「赤組」と「白組」に分かれることが多いですよ。この由来は平安時代後期の源平合戦にあります。この時に平氏が赤い旗を、源氏が白い旗を掲げて戦ったため、二つの対抗する組み分けをする時に「赤」と「白」で分けるようになったと言われています。他にも二つの色で対照的なものを表す表現は、「白黒はっきりさせる」の「白」と「黒」、「赤鬼と青鬼」の「赤」と「青」といったものがあります。ここでも「白」「黒」「赤」「青」の4色が使われているところからもこの4色が日本語の中で特別な色であることがわかつてと思います。

(3)は「黄色い声援」で意味は「甲高い声で応援をすること」ですね。声援には色がついていないのになぜ黄色いという言葉がついているのでしょうか。一説には、お経が元になったと言われています。昔、お経を唱える時に抑揚をつけていて、その教典にその抑揚をつける箇所に記号を付けていました。その時、甲高く読む記号を黄色で書いたことから甲高い声のことを黄色い声と呼ぶようになったといわれています。また、中国では、黄に子どもという意味があり、子どもみtainな甲高い声のことを黄色い声と呼んだという説もあります。黄色と聞くと黄信号や工事現場の看板といった注意喚起をイメージするかと思います。中国では違うイメージなんですね。

色にはいろいろなイメージがあります。青には未熟というイメージがあってそこから「青春」や「青二才」といった色とは直接関係のない言葉が生まれています。他の色はどうか考えてみましょう。